Puddle ミズタマリ

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐｕｄｄｌｅ　ミズタマリ

【Ｎコード】
Ｎ６７７６Ａ

【作者名】
並盛りライス

【あらすじ】
雨が去った後で、赤い傘を持った男と黒い鞄をもった女がすれ違う。

六月の雨が全てを洗い流してしまったかのように、辺りは静かだ。
薄暗い空は重たげに湿気を纏い、日はすっかり沈んでしまった。
時折、思い出したように運送用の中型トラックが通る以外には、ほとんど車は通らなかった。
そんな通りにも関わらず、一人の学生風の男性が歩いていた。
「すっかり遅くなっちゃったな」
急ぐでもなく、そう言った彼の右手には、どこか不釣り合いな原色に近い赤の傘が握られている。
そのちょうど反対側から、水商売風の女が走ってきた。
すれちがい様に、肩が激しくぶつかって、女が持っていた黒いハンドバックが濁った水に落ちてしまった。
「すみません」
男は驚いて、躊躇いもせずに鞄を拾いあげた。
しかし、女は困ったような顔をして言った。
「そんなに汚れてしまったら、手に持った時に私の指先まで汚れてしまうわ」

見ると、女の指には赤いマニキュアが塗られていた。
男は善意から、鞄を拾ったが女は受け取らなかった。
「そんなに良いものじゃないから、その辺に捨てておいて」
女はそういうと、男の顔も見ずに駆けていってしまった。

男は、そのまま暫くの間そこに突っ立っていた。
男の指には濁った泥で汚れていて、こびりついた砂が爪の中まで入っていた。

男は鞄を持っていくか、それとも置いていくか迷った。

この鞄をもう一度濁った水の中に捨てれば、また誰かに親切な人か、欲の深い人が手を汚すかもしれない。

男が去った通りは、以前よりもいっそう静かになった。

濁り水には、黒い鞄を中には入れた赤い傘が差してあった。

その原色の赤だけが、この通りで唯一の色だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6776a/

Puddle ミズタマリ

2010年10月11日00時52分発行